

第21回全国健康福祉祭鹿児島大会

にせんはち

ねんりんピック鹿児島2008

第21回全国健康福祉祭かごしま大会(ねんりんピック鹿児島2008)の一環として募集した「長寿社会・私の主張」長寿社会・小学生作文「長寿社会・小学生の絵」には総計で3,827点もの作品のご応募をいただきました。その中から入選した「長寿社会・私の主張」「長寿社会・小学生作文」各2編(P14~P17)、「長寿社会・小学生の絵」13作品(P24)を掲載いたします。また、厚生労働大臣賞、鹿児島県知事賞、(財)長寿社会開発センター理事長賞につきましては、大会開催期間中の10月26日(日)宝山ホール(鹿児島県文化センター：鹿児島市)において表彰式を行う予定です。

「長寿社会・私の主張」厚生労働大臣賞 高齢者の生き方 馬詰 真一郎 奈良県北葛城郡 九十三歳

私たちの世代は皆戦争の時代を生きてきました。男も女も、戦場へ行ったりも行かなかったひと、同じように生き残ったひと行かちです。私も戦場へ行き、たくさん苦しいとたちが残れるのを見てきました。だからいまこうして生きているのは、そのひとたちのお陰であり、私たちはそのひとたちの、生きてきたであろう命をも生きねばならないと思っています。

高齢者の生き方とは、だから自分のためだけでなく、戦争で亡くなったひとたちのためにも、少しでも世間のお役に立つ、ボランティアをすることだと思っています。そしてそのために、健康な体であるように、毎日の運動を怠らないうことだと思っています。一日でも長く生きられ、あつたり、病気など他のひとの迷惑にならぬようにして、ボランティアに励ましよう。

そんなことを申しあげる私のいまの生き方を書かせていただきます。私は五十五歳で銀行を定年退職して、大阪の中堅商社にお世話になり、その間七八歳のときに奈良県下の老人ホームに妻と入居しました。そして八五歳になつて会社を辞めたとき、いままで自分のため家族のため働いたのだから、今度はその世間のお役に立つことをしたいと決心しました。そのとき何気なく聞いた「ホスピス講演会」で、私は緩和ケアやホスピスについて勉強しました。講師は終わりに、ホスピスはいまほとんどど各県にあるが、奈良県を含む六県だけがまだありません、と言われました。奈良県にまだホスピスがないと聞いて、聞き逃すこと

とができませんでした。誰かが作ろうと言わねばならないのでないか。その誰かを待っているよりは、私も、私でも作ることはできないか。考えた末に、入居していた老人ホームの園長さんに訊いてみました。

園長さんは「ホスピスの勉強会を作つて、同じ気持ちの会員を集めることから始めねばなりません」と教えてくださいました。そして「あなたと私で会を作りましょう」と言うてくださいました。こんなありがたいことはありません。その場で会員二名の「奈良県ホスピス勉強会」が発足しました。そして会員募集のためにインターネット上にホームページを作りました。私はメールくらゐはできましたがホームページは作ったことがありませんので、作成ソフトと参考書を買つてきて勉強し、何とか作りあげて名乗りを挙げたのがその年、二〇〇〇年二月のことでした。

翌年四月にそれまでの入会申込者を集めて第一回の勉強会を開催しましたとき、集まった会員は全部で一四名でした。そして九月に県文化会館を借りて初めて講演会を開催したとき、会員は七五名になつていました。その会員が皆集まつて講演会の準備から受付や案内などの仕事をしてくださいました。お陰で講演会に入場者が千人に近い盛会で、はるばると東京からお出でくださった当時桜町病院ホスピス長の山崎章郎先生のお話に感激して、会場での入会申し込みが七五名もありました。

翌二〇〇二年には「奈良県にホスピスを」旗印に署名運動を開始しました。目標は二万



名としていましたが、秋になつて集まつた署名を知事さんと県議会議長さんにお届けするときは台車で運ばねばならぬ程で、三万八千名を超えていました。そして翌二〇〇三年春には県内に初めてのホスピス病棟二〇床開設と県補助金の予算計上の報を聞きました。そのホスピスが実現したのは、その翌年五月のことでした。

このようなホスピス運動の経過を申しあげるのが目的ではありませんが、この運動は八年経つたいまも続けています。そしてその間に私も九〇歳を越えてしまいました。願ひていくもこんなな生きたいと思っています。しかもまだ命ある間は運動を続けたいと思っています。そのためには体力を維持しなければなりません。その方法として不器用な私にできることは歩くことです。毎朝五時半に起きて仕度をし、出発するのは五〇分頃で、六時三〇分まで歩いてラジオ体操をします。夏は良いのですが、冬の薄時に寒いときに歩くのは大変です。それでも始めたのは六〇歳でしたから、もう三〇年を越えました。毎日一万歩の目標も変わっていません。

いつまで続くかわかりませんが、折角いただいているこの命を無駄にしないで、毎日少しでも世間のお役に立てるように生きねばなりません。そのためにできるだけ健康を維持するためには歩き続けたい。それが戦争で亡くなったひとたちに対する私の任務だと思っています。